

# 太平洋の森から

2016年3月発行  
No. 37

パプアニューギニア  
ニューブリテン島南岸の原生林を守る人々



タボロ村のピーター・キケレさん



タボロ村の人々



ムー村のポール・パボロさん



マウナ村のモイゼス・サレレさん

2015年度

# パプアニューギニア調査・連帯訪問の報告

訪問日程：2015年10月24日～11月14日（清水靖子）

10月31日～11月10日（辻垣正彦・渡邊充夫）

訪問内容：

ポートモレスビー、ホスキンス、ラバウルでの調査・打ち合わせ

ニューブリテン島南岸への横断旅行とアミオ村・タボロ村・マラクル村訪問

ニューブリテン島南岸の村々の原生林を守る村々への連帯・裁判支援

清水靖子

## I 干ばつに影響されない原生林の村々 豊穡な森と川と海に暮らす人々との出会い

“霞”が、首都ポートモレスビーを包んでいた。

その“霞”とは、干ばつによる土埃と、灌木火災のくすぶり、排気ガスの混じったような霞で、「数ヶ月間雨が降っていないの」と出迎えのシスターが語る。

10月25日、空港からの道々、車中に流れ込んでくる空気に、たちまち咳き込んでしまう。

パプアニューギニアは長期干ばつの只中にあった。

数ヶ月間雨が降らず、被害人口は、人口400万人のおよそ3分の1におよんでいた。

干ばつと霜被害は、高地の各州に始まり、低地と島々を含む各地に広がっていた。畑の作物の立ち枯れ、水と食糧不足。加えて各地で頻発する森林火災が被害を大きくしていた。学校でも休校がつづく。

首都ポートモレスビーはサバンナ気候であることから、干ばつの影響は深刻であった。オーエンスタンレイ山脈からの豊かな水嚢からの給水も、計画断水が恒常的となっていた。

### 森のあるなしによる干ばつの影響

今回の私たちの旅は、ニューブリテン島を南北に横断するものであり、その過程で南北の気候変化、森林

の有無、干ばつ状態の差をつぶさに見ることになった。

ニューブリテン島北部においては、伐採跡とオイル・パーム・プランテーションが広範囲を占め、干ばつと森林火災、水と食糧不足が激しかった。地下水は乏しく、オイル・パームの実は成育せず、生産されたパーム・オイルの海外からの買い付けもストップ状態にあった。

しかし、南北横断の分水嶺を過ぎたところから南は違っていった。特に原生林を守りつづけている地域には、実に豊富な降水と、湧水があり、タロイモ、ヤムイモも健康に育っており、干ばつとは無縁の世界が展開していた。そもそも南岸のこの時期は乾季だというのに、お湿りも充分にあった。

これは何を意味するのだろうか。過去25年間の調査の集約でもあるが、森を破壊された地域の砂漠化への悪循環と、原生林の地域との豊かさの差。森の消失こそ干ばつへの引き金の一端となっていることを再確認した貴重な旅であった。

このことを、「パプアの森を守る会」としても、日本の人々にも、声を大にして語り続けていきたい。

[表紙の写真撮影者] 鳥：渡邊充夫、人物：清水靖子

[本文と裏表紙の写真撮影者] 鳥・カヌーの男性：渡邊充夫、人物・風景：辻垣正彦・渡邊充夫・清水靖子



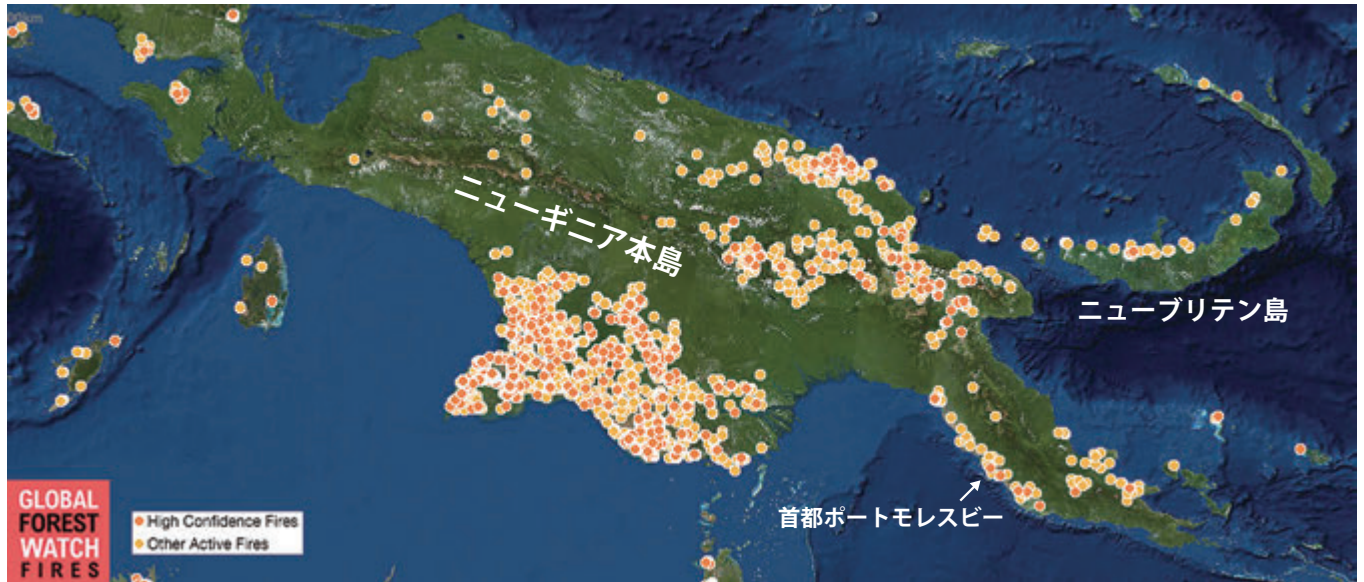
かつて1997年の大干ばつ（4月から11月）では、「パプアの森を守る会」も、大がかりな調査・支援活動を行った。そのときも同様の状況を見た。物資の支援だけでは、干ばつの解決にならない。最も重要なことは、太古からの原生林を守ること。原生林を商業伐採に売り渡してはならないことである。

“気候変動”に原因を押し付けて、手を打ってしま

おうとする策略は、こうした伐採問題を覆い隠す。

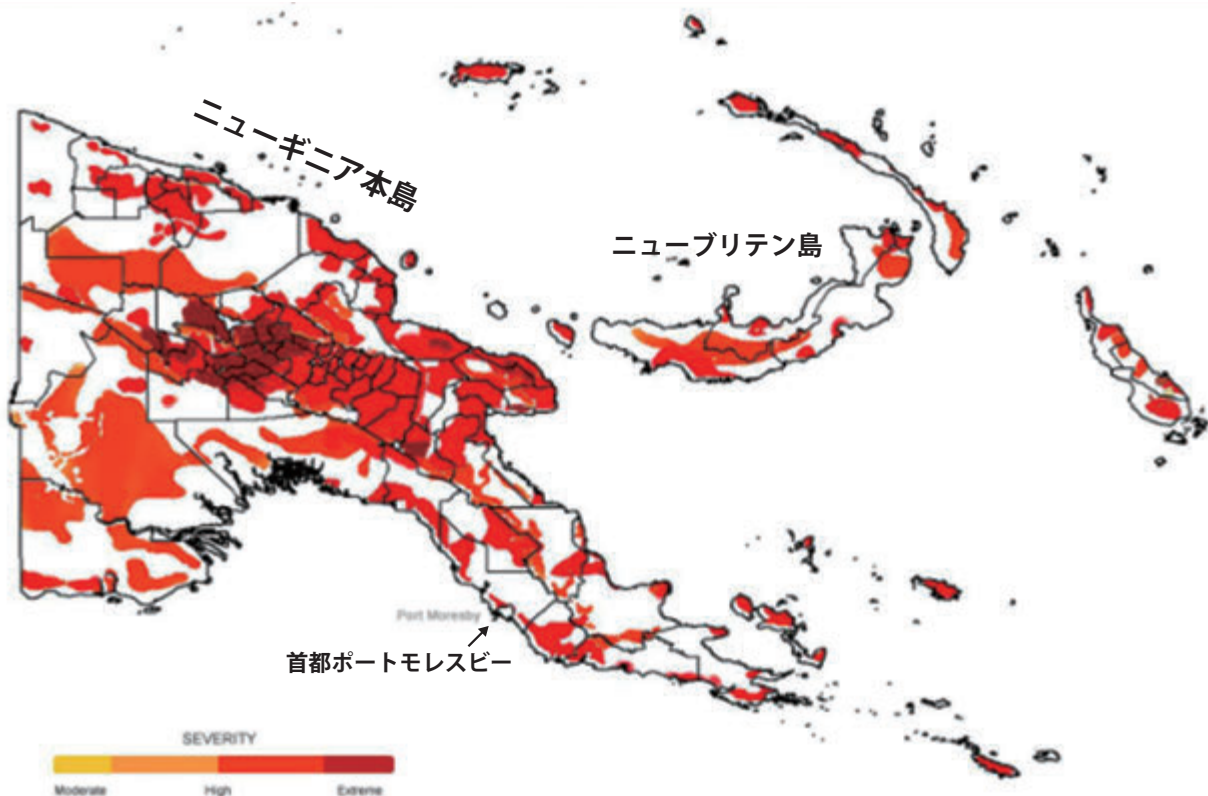
### 10月25日（日）

首都では、APECの16カ国からの農林・森林大臣会議（28日）を目指して、伐採の推進側が一堂に集まってくる。準備のあわただしさが伝わってくる。



森林火災発生地域（インドネシアとパプアニューギニア）2015年10月

出典：NDC Rapid Assessment Progressive Reports October 2015, Global Watch



### パプアニューギニアにおける干ばつ発生地域

出典：http://news.mongabay.com/2015/10/nasa-photo-shows-new-guinea-going-up-in-flames/、2015年10月7日

「森を守る会」が、長年支援してきた原生林地域、コリンウッド湾地域、ニューブリテン島南岸の村々には、上記の地図でも干ばつは起こっていない。

それに抵抗するNGO側も動いていた。ACT NOWなどが主催する会議がそれである。そのゲストスピーカーとして招かれて首都に来ていたのがポール・パボロさんであった。宿泊先にも来訪してくださり、一年ぶりで会う彼は、ふくよかで元気そうだった。

村にいるときと同じようなTシャツと、粗布袋の斜めがけスタイル。そのブレない素朴さは、彼に託された村人からの願いを実現するシンボルのようでもあった。

腰を落ち着いたところで、「森を守る会」の支援者の皆さんが、もっとも心配しておられる裁判状況について彼から話を聞いた。

①ポール・パボロさんたちは、2014年の11月14日に、ギルフォード社（リンブナン・ヒジャウ社傘下）への操業中止命令を、裁判で勝ち取った。ポマタ地域・



ポール・パボロさん

ラロパル地域・ナキウラ地域の村々は、伐採のない平素の暮らしを取り戻し、喜びをわかちあって7ヶ月を過ごした。

②これに対して、リンブナン・ヒジャウ社側は、森林省と連携して巻き返しに出た。村人には知らせずに首都で独自に裁判を起こし、森林省が伐採許可を出したことを理由に操業再開命令を勝ち取る（2015年7月3日）。突然の稼働開始は、村人にとって寝耳に水であり、村側は抗議に入る。

③リンブナン・ヒジャウ社は、ほぼ同時期にベース・キャンプと操業地域に、他地域からの村人の出入りを禁じる命令を出し、村人への威嚇・暴力・拘束などを強化する。

④村々の指導者であるポール・パボロさんへの、企業側からの集中攻撃裁判が開始される。ひとりの村人（企業側に寝返らせた人）を原告にして、ポールさんを被告に仕立て、ポールさんが隣接する地域の操業場所に入り、操業妨害をしたとして起訴。事実無根の嘘であったが、彼はその公判への出頭のためにラバウルに行かなければならない日々となる。これは彼を村人から離させる作戦であり、狙いを定めてリーダーを裁判責めにするいやがらせであった。日本の原発裁判でも企業側からのこうしたやり方は多々ある。

「企業は、政府と組み、警察と組み、あらゆる方法

#### ニューブリテン島中央部でSABL下に入れられた地域（東から西へ）

ウヌ・シゲテ地域（ジャキノット湾のマラクル村など）	原生林地域。伐採まだ入らず
ポマタ地域 15000ヘクタール	激しい抵抗の中で2010年伐採開始、裁判闘争中
ラロパル地域 11000ヘクタール	激しい抵抗の中で2010年伐採開始、裁判闘争中
ナキウラ地域 16000ヘクタール	激しい抵抗の中で2012年伐採開始、裁判闘争中
レラ地域（タボロ村など）	原生林地域。伐採まだ入らず





で村人の抵抗を押さえ込み、不法に裁判を起し、抵抗する者に暴力を振るっているのです」とポール・パボロさん。

⑤ポール・パボロさん側は、契約の不正・欺瞞を訴え、再度操業を停止させる裁判手続きを再開した。しかしなぜか弁護士の動きが遅い。「誠意のある優れた弁護士を模索中」とのことであった。

私は今後の「森を守る会」からの引きつづきの支援と、3週間後にラバウルで彼と落ち合う約束をして別れた。

### 奪われた500万ヘクタール（山梨県の10倍以上）の原生林と土地

政府が企業と組んで各地の土地収奪を行ってきたSABL（スペシャル・アグリカルチャー・ビジネス・リース）地域は合計約500万ヘクタール。パプアニューギニア全土に散在する。

日刊紙『Post Courier』10月27日から抄訳。



「SABLをキャンセルせよ」とセピック地方の村人  
出典：Act Nowのホームページ

「SABLにより、約500万ヘクタールが現地住民から奪われている。この土地がオイル・パーム・プランテーションなどの開発を名目に、原生林が伐採され、輸出されてきた。年間に伐採される木材の3分の2がSABL地域から輸出されている。Act NowなどのNGOが、APEC会議に向けて、この問題を提起し解決を訴えている」

#### パプアニューギニアでの丸太輸出力

2013年の丸太輸出力 3,297,385m<sup>3</sup>

2014年の丸太輸出力は3,800,186m<sup>3</sup>となり、過去最高となった。

（統計資料：Timber Digest 2015）

### 腐敗するパプアニューギニア政府

怒涛のように押し寄せる伐採企業、鉱山企業、それらが支配する銀行・金融業、警察部門、こうした部門でのパプアニューギニア政府の職務清潔率（汚職のない状態の率）は、174カ国中145位に位置し、最低に近い。

出典：International Transparency Papua New Guinea (TIPNG) 2015年12月15日

#### 10月26日（月）

そうしたなかで、私は聖ヨゼフ・インターナショナル・スクールで、先生たちから頼まれて、生徒たちに森林伐採問題、特に不正取引や干ばつ関連の話をする。政治家や企業の金持ちの子どもたちの多いこの学校への私のメッセージを込めたが、同じ思いで指導している先生たちがいるのは素晴らしい。

#### 10月27日（火）

今日の日刊紙NATIONAL（リンブナン・ヒジャウ社経営）2015年10月27日に、APEC会議を前に、伐採推進側からのお膳立て記事が出た。巧みな宣伝であった。

その内容は、サテライトから撮影した映像を元に、日本のJICAが、パプアニューギニアでは25年間に、さしたる“森林”劣化がみられないと主張。FAO（国連食糧農業機構）もその映像と主張を歓迎。

サテライトからの映像では、“森林”も“植林”も、オイル・パーム・プランテーションも、“グリーン”

# JICA dispels forest claims

MORE than 80 per cent of the country is still covered by forest, according to a recent study by an aid agency, dispelling claims by anti-logging activists.

Using satellite sensing, the Japan International Corporation Agency (JICA) reported that there had been no significant deforestation in PNG over the last 25 years and that the forests were in good health.

The agency's analysis was endorsed by the United Nations' Food and Agriculture Organisation.

"This is a good news for the PNG government who are hosting a meeting of the APEC forest ministers in the country this week," Bob Tate, executive director of the PNG Forest Industry Association says.

Thanking JICA for the research, Tate said this was the first full inventory ever undertaken of the country's forest estates.

"This data is the foundation we need to move on to the next step to implement sustainable forest management in the country," he said.

Tate said this system would preserve tracts of forest and species dependent on them as well as ensure selective harvesting.

"These principles guide PNG government policy today, but a national standard for sustainable development is needed.

"This latest research finding indicates that sustainable forest management has been practised and has demonstrated to be successful but concerns about deforestation have largely been exaggerated".

He said the findings proved the anti-forestry activists' misconception and miscalculated information on forest and illegal logging in PNG.

He said Greenpeace and other anti-forestry activists had wrongly asserted repeatedly that 70 per cent of the timber was illegally logged.

"The only source of this number is an unverifiable claim by the World Wildlife Fund (WWF)," he said.

"No timber was allowed to be exported without being checked by independent inspectors but yet the

anti-forestry activists and the World Bank continue to cite the number."

Tate believes the APEC forest ministers will focus on ways to improve forest management and how forestry could be used to reduce greenhouse emissions.

He said now that the country's comprehensive forestry inventory was in place through JICA's analysis, he expects the European Union will fund further research on the carbon cycle in the PNG's forest species.

## PM: University buildings will be completed in 2016

PRIME Minister Peter O'Neill says the Science IV and Law School buildings at the University of PNG, on which work has stopped because of contractors not being paid K32 million, will be completed in time for the 2016 academic year.

He said that yesterday, showing his concern about the situation.

China Overseas Engineering Corporation (COVEC) is owed K19.4 million to complete the Science Building, which was sup-

programme," O'Neill said. "We are doing that again in the 2016 Budget.

"We have got Planning, Treasury, and Finance looking into the commitments that we have made.

"We will look at why the funds have not been released on a timely basis.

"I can assure you, after talking to the contractors, that these facilities will be ready for the next academic year next year.

"We will ensure that these proj-



出典：National 2015年10月27日

に写る。“植林”を“森林”のカテゴリーに入れることを主張しているFAOにとっては、願ってもいない映像であった。もちろん伐採を進める政府・企業にとっても同様に利用できる映像なのだ。

遠くサテライトからの“グリーン”映像で、“森林”を語り、伐採とオイル・パーム・プランテーションの災禍を覆い隠し、原生林を奪いつづける“伐採マフィア”によって、民の叫びは踏みにじられていく。APECの会議がどのような結論となるかは、この宣伝が暗示しているかのようであった。

夕食を首都のレストランでNGOの友人と共にする。暮れなずむ都会の一角で再会を喜び会い、とりとめない話しから、最近の裁判の話題にまで盛り上がる。村人側の立場に立って“操業停止や伐採差し止め”などの判決を下すことを、判事が怖れる傾向になっているとのこと。理由は企業と政府から圧力を受けるからだ。あるいは賄賂が効いている。判決後に判事が左遷されることも多々ある。弁護士も同様であるとのこと。それでも頑張っている判事や弁護士もまたいるなど実情を知る。

ポール・パボロさんの裁判の件についても貴重な示唆をもらう。

## 10月28日（水）

ポートモレスビー空港からホスキンス行は夕方5時発であった。2時間遅れのため、迎えの人が待たずに帰ってしまったらどうしようと心細くなる。機内で隣席の男性は、「キンベで小売業をしていて、車で家族が迎えにくるから、いっしょに乗せて行ってあげるよ」と言う。万が一のときにこれで安心だ。私は「You are My Angel！」と感謝の言葉を繰り返す。

ホスキンス空港では、ADB（アジア開発銀行）のローンによる拡張工事も完成し、増発された大型・小型機の頻繁な発着場と化して賑わいを見せていた。

多くの人々に混じって私を迎える顔があつてほっとする。アミオ村出身のセシリアさんの笑顔だった。20年の歳月を経て今は修道院のシスターになっている。伐採調査をかつて共にした教会のメンバーの顔も見えた。「皆で教会のワゴン車で迎えに来たよ」とのことであった。「My Angel」の男性が「良かったね」と笑顔で合図する。深く感謝して別れる。

夕暮れの中を、私たちの車は、少し寄り道をしてバロカという村の教会へ赴く。

小さなロウソク行列に参加するためであった。村の



小道を、幼い子どもたち、母親たち、長老たちが、これも鄙びたマリア像を運びながら、祈りながら歌いながら歩んでいる。暗闇と星空に灯火がゆっくりと揺れる。その沁みる詩のような美しさに、心の奥がしーんとなる。こんな情景を私はずっと忘れていた気がする。この村もかつては深い森だったが今はない。天空に星たちの涙があった。

セシリアさんの修道院に着いたのはかなり遅くなったが、アミオ村からの魚とタロイモでもてなしてくださった。私がアミオの山と海の幸が好きなことを覚えていてくださったのだ。足の不自由な、もうひとりのシスターの心遣い、優しさも身にしみた。

洗うための水道は出なかった。干ばつによる断水で、溜めた水での洗い物をする。

## 10月29日（木）

FORCERTのコスマスさんと南岸への旅の打ち合わせの日であった。

「伐採企業の飛行機に乗らずに、私たちとの共同の旅行計画として万端準備しますからぜひ！」と、昨年来の計画の提案者FORCERTのコスマス・マカメトさんが早朝に来訪する。ポール・パボロさんの裁判支援も、一緒にやってきた仲間である。

打ち合わせの内容は、ホスキンス→南北横断旅行→レラ→アミオ→タボロ→マラクルという旅程の詳細であった。

この計画の目玉は、原生林を守ってきたタボロ村との連携・宿泊が、「森を守る会」にとって始めて可能



ピーター・キケレさん

となることであった。ナカナイ山系からつづく美しい原生林の村である。

屈指・屈強のリーダーのピーター・キケレさんから、「ヤスコたちよ。僕たちの村のゲストハウスに泊まれよ」と誇らしげに言われて10年以上たっている。地理的・日程的制約で行かれなかったが、今回初めて可能となった。

さあ、準備の開始だ。

頑丈な四輪駆動のランドクルーザーの手配、運転手との交渉、食糧買い込み。

FORCERTの若いスタッフが同行するとのこと。加えてトマスさん（アミオ村の昔馴染みで現在ホスキンス在住）がボランティア参加となった。親切で思慮深いトマスさんがいれば旅のすべてにおいて安心であった。

## 10月30日（金）

今日はトマスさんと一緒に、公共バスと徒歩で村々を訪問する。

まず旧知のブルマ村を訪れた。

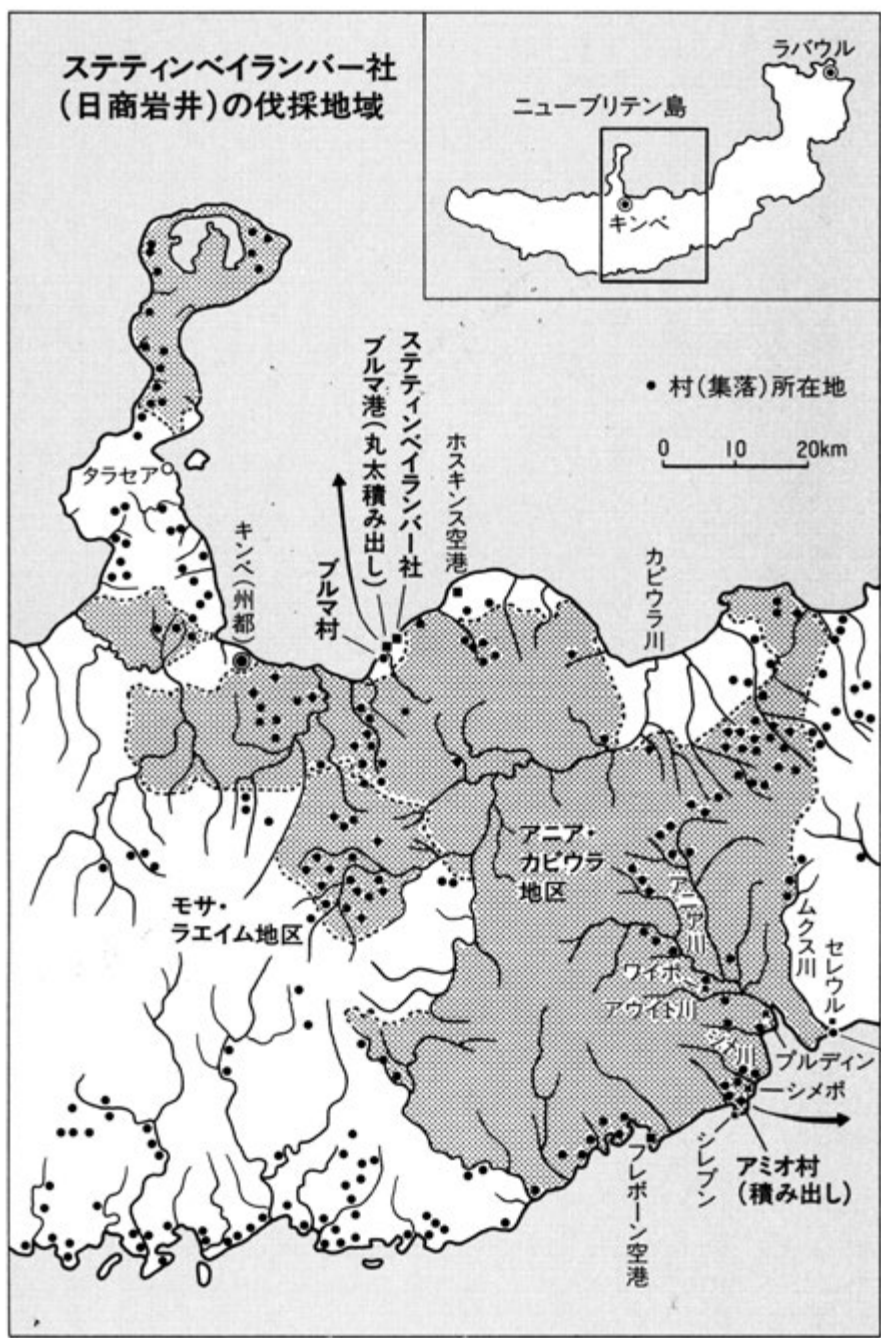
ブルマ村は、日商岩井（1970～2003年）操業の拠点と積出港とされ、私たちの会と連携を続けてきた村である。日商岩井に抗議するときも、伐採調査も共に行ってきた。

残念なことに首長のベルナルド・モタさんは入院中で不在だった。しっかり者の妻が留守宅の要となって大家族で暮らしていた。彼女から話を聞く。

「森が失われているので被害は深刻なのよ。干ばつで畑の芋や野菜はできないし、後ろの川からの水も干



ブルマ村のモタさん家族







干ばつで干上がったブルマ村の川

上がって濁っているの。伐採以前は深い川だったのに」。たしかに河岸は切り立った深さを見せて、かつての深い川を思わせる。

この川は2014年の台風で崖が崩壊。その後石積みの護岸工事を完成させていた。今年は干上がって底まで見える。

「収入もわずかよ。コプラも価格が下がっているし、頼みのカカオ豆には害虫が入ってダメ。海で小魚を獲ってマーケットで売っての収入が精いっぱいなの」と言う。

これまたしっかりした若い女性が傍らから付け加える。「そもそも、土が干からびて死んでしまっているの。dead soil ってことなの。耕そうとしても硬いのよ」

せめて、今夜の食材用にと、私はわずかなお金を渡し、心を残しながらブルマ村を後にする。

その足でブルマ港に面するマタネコ集落に行くが、干ばつの日照りで、私自身がバテ気味になってしまっていた。でもがんばって歩こう。

マタネコ集落でのヒ素汚染の泉を見ることは、さらに深い悲しみとなって迫ってきた。日商岩井が20年以上にわたって、丸太集積場の奥の製材の防虫処理からのヒ素を流し、地下水を汚染し、村の大地も泉も汚染した結果を見ることになるからだ。日商岩井は、この汚染までも放置して去った!!（「森を守る会」として汚染除去交渉をした経緯については、過去のニューズレター、HP、清水靖子の著書にあり）。

午後の日差しのなかで、母親と子どもたちと豚が泉に入って水浴をしていた。この水を浴びた多くの村人



ヒ素汚染されたマタネコ集落の泉



丸太集積場の子どもたち（マタネコ集落の目の前にある）

が皮膚病を患ってきた。それが原因か？で死んだ人々もいる。豚も犬が死んだ。でも、ここ以外に水浴びをする場所が村にはないのだ。

“マタネコ”という意味は、“水の湧き出る口”であったことを私たちに告げる。その豊かな水源郷を、日商岩井はヒ素漬けにして去っていった。

今回、村には豚の数が多くなっていた。良い収入源となるのだそうだ。

日商岩井が2003年に逃げ去った後は、マレーシア系の企業が継承して操業。日商岩井が植えたユーカリを伐採しては、日本ほかに送っている。

飲み水は塀の外から伐採企業によって供給されているが、飲み水に適さない濁り水だとのことである。

バテてしまっていた私だったが、同行のトマスさんが「自分の家に寄ってほしい」とのたつての懇願にOKと返事してしまう。そこからさらに歩くこと10分。

焼かれたプランテーションの反対側のオイル・パーム・林の奥地にあった。歩いて行くと、オイル・パームの幹を、白いカビ状のものが覆っている。実も生育していない。干ばつで地下水が枯渇しているためとのことだった。



見渡すかぎり、切り倒され焼かれたオイル・パーム・プランテーション



幹にカビが生えているオイル・パームの木



火事で焼けたオイル・パーム・プランテーション

小鳥の声もしない、死の林、オイル・パーム・プランテーションを抜けると、彼の家があった。

### 10月31日（土）

昨日の日照りでバテたうえに、肩も背中も腫れ上がった。

でも、今日は、横断旅行用の買い物の日だから、がんばらなくては！

飲み水、クーラーBOX、食器、バナナ、地元のオレンジ、ココナツ、パン、コメ、コーヒーの粉、砂糖など。その騒然とした土曜日のスーパーマーケットで、元氣なく買い物をする。

突然、「Nice to see you again. Are you OK？」と呼びかける声があった。一瞬誰だか思いだせない。彼が「I am your Angelだよ」と微笑んだとき、はっと気がつく。「困ったことがあったら、何でも手伝える」と言う。後ろで妻と子がにっこりと頷いていた。なんと親切なことだろう。「ありがとうございます」と深く頭を下

げる。

今日も断水だった。この間の汚れた衣類をそのまま詰め込んで、南岸の村に行くことになる。

遅い夕方に辻垣、渡邊一行が元氣いっぱい到着する。修道院の姉妹たちが、歓迎の夕食をアミオからの魚で饗してくださったので、少し元氣を回復する。その美味しさが身にしみた。

### 11月1日（日）

暗い中を4時に起きると、もうランドクルーザー四輪駆動の運転手が現れている。

「屈強・頑丈な人々だけが成し遂げることができる旅だ」と聞いた道だが、小柄な身体に屈強なエネルギーを漲らせた運転手は、「まかせておきな！」と胸を叩く。そうして8時間におよぶ旅が始まった。

ホスキンスから南へ道を入ると、オイル・パーム・プランテーションが果てしなくつづく。日商岩井がか





焼けたプランテーションを背景に撮影。  
左から辻垣、運転手、トマス、渡邊。

つて伐り、その後プランテーションとなったのだ。

ある部分は枯れ、火災で焼けている。不注意の火が広がったのか、干ばつ特有の自然発火なのか、焼けたら、枯れたりしたオイル・パーム・プランテーションがつづいている。

途中で朝食休憩をする。

分水嶺から南は、凸凹の山越えと谷渡りとなる。

日商岩井は、ブルドーザーで樹々を倒して道を造り、原生林を伐り、その丸太を朝な夕な日本に運びつづけた。凸凹道を残して。今、私たちはその悪路をランドクルーザー四輪駆動で駆ける。丘への登りあり、下りあり、泥沼あり、喘ぎながら、突進しながら車は行く。何かにしがみついていないと、身体は上下左右に振り回されつづける。小柄な運転手はどんな状況にも対処していく。

ふと、かつてヘリコプターで、この上空を飛んだときのことを思い出した。南岸の伐採の初期で、眼下に繰り広げられた原生林は溜息がでるほど、深く美しかった。その間を、血が滴るような赤土の伐採道が森をズタズタにしていた。今や太い樹もない荒廃した二次林だけがつづく。辻垣さんは、「この道を通して丸太を日本に運んだ何十年。森は裸になった。本当に申しわけなく思う」と呟く。

走ること2時間、やっとアニア川の辺に出る。アミオ村の仲間たちとかつて皆で来たことがある川だ。日商岩井が放置した橋梁が見える。

次にアウイト川、ロブニ川などに出会う。ここにも南岸のアミオ村からは皆で来たことがある。村人にとっての聖地（石積み祖先の聖なる場所）があった地



アニア川の壊れた橋



清水、辻垣、トマスさん レラ湾にて  
ピーター・キケレさんのボートを待つて休憩する。ボートでアミオ村はすぐそこにある。

点だからである。

さらに行くと、ついにRera（レラ）という懐の深い広い湾に到着し、休憩する。

アミオ奥地の森からのアニア川、アウイト川、シメ川、その他大小無数の河川が、この湾に注ぎつづけている。この地域は、おそらく世界でも希な海の生き物の宝庫であると想像できる。

このレラの浜辺は、南岸への積荷と、北岸への積荷が交換される場所にもなっている。私たちの車と、ボートの荷物の詰め替えもここで行われた。奥地の水が竹のパイプを通して岸辺の水場に滴っている。

湾の向こう側には、ナカナイ山系の重なりが墨絵のように見える。その墨絵のはるか向こう、ムクス川を超えたさらなる彼方に、明日の宿泊地タポロ村がある。

午後、アミオ村到着。

懐かしい笑顔、また笑顔。アミオ村はいつも暖かく優しい。

森を守るリーダーのスティーブンが、「アミオはもう二度と伐採企業がこないように皆で誓い合っている



森を守るリーダーのスティーブン

よ。安心してくれ」と嬉しそうに私に語る。

落ち着いて座ったところで、大切なお土産のDVDを渡す。

「今夜DVDの上映会だぞ～」のニュースは、村中にひろがった。夕食後に目の前の広場の店先で上映会が開始される（電源はポータブル自家発電機）。

DVDの内容は22年前の1993年の懐かしい日々を編集したもの。今は帰天した長老たちの顔がいっぱい出てくる。長老たちは、日商岩井が無断で、ブルドーザーを増加・陸揚げさせた事件に怒って抗議している。ソポ首長は優しく病人を癒している。圧巻は、腕白っ子が鳥の歌と踊りを気恥ずかしげに披露している場面であった。

その夜は、かつての腕白っ子が親として、子どもたちと頬を寄せて上映会に集まっていたものだから、村の広場は笑いと涙の渦に包まれる。私もその反応を見て、あまりの可笑しさにお腹が振れ、また涙が出た。長老たちを見ては、多くの人が泣いた。

想像を超えるウケだった。日本からの私たちが宿舎（広場を見下ろす二階屋）で眠りにつく頃も、DVDを繰り返して見る賑わいが聞こえてきた。苦勞して編集して良かった!!



アミオ村の女たち



ジョーソポ首長、清水、辻垣

## 11月2日（月）

さわやかな目覚めと朝を迎える。

今日は、清水は村の暮らしの状況の聞き取りと、女性たちから踊りや伝統の遊戯を教えていただく。

辻垣・渡邊両氏は、若者たちとシメ川調査、探鳥、魚釣りに出かけ、アミオの森と川を経験して来る。（→詳細は両氏の報告を）

しかし、やはり森の豊かさが戻るのは遠く、川での魚影も、森での鳥の飛来も乏しいとのことだった。それを聞いて心が痛む。伐られた森が回復するのは、永く遠い年月がかかる。太古の森のように戻ってこないのかもしれない。



宿泊先となった二階屋のベランダで





日商岩井が破壊して以来、水量が戻らないアウム泉

日頃の衣食住は森と海から得ている。収入源としてアミオ共同体が努力しているのは、魚や農産物をキンベに売りに行くこと。それを運ぶトラックは、西ニューブリテン島選出議員が寄付してくれたとかで、選挙への応援の成果はこういうものなのだろう。

収入の第一はビートルナッツ（ピンロー樹）。二位はカカオの果実を乾燥させたもの。ここでは害虫は入っていない。年間4トンぐらい（1トン60袋＝1袋150キナ×60×4）の収穫であるという。

その他はコブラ、魚など。

伐られた跡とはいえ、アミオ村は広大な森の地主グループだ。伐採マフィアからの勧誘の魔の手が繰り返して伸びている。しかし、「もう二度と伐採を許すことはしない」と誓っている。

再会と連帯を誓って別れを告げる。



カカオの木

## タボロ村へ

2時頃、タボロ村のピーター・キケレさんがボートで迎えに来る。

いよいよタボロ村に向かう。この海はパプアニューギニア随一ではないだろうかと私は思う。

原生林からの広大なアニア川、ムクス川、無垢のナカナイ山系からの多

様な川筋！

その滋養が海の魚を養い、その魚をめがけて海鳥が水面に群がっては、円を描いて上昇し、また群がる。水面下の無限の魚影が引き寄せているのだろう。ボートのまわりは、その動きで激しい水しぶきとなる。

薄墨色の原生林の半島と鳥と魚。それは最後の熱帯雨林の幻のような姿として私たちの目の前にあった！この海を失ってはならない。私たちは誓いあった。

かなり深い川の入江を左折すると、そこがタボロ村だった。崖の上から太鼓の音と歌が聞こえてくる。「長老のウイリアム（表紙の写真）が出迎えているよ」とピーター・キケレさん。

出迎えのシンシン（踊り）の音色がさらに熱気を増すと、女たちが崖を降りてきて、私たちに歓迎の髪飾り・首飾りを授与する儀式となる。





出迎いの踊り

老若男女が輪を描いた踊りは、私たちがゲストハウスに誘導して、挨拶がはじまる。短いミーティングの後に、原生林の幸の食卓が準備されていた。

タボロ村の人口は565人で180家族。川の両岸にヤシで葺いた屋根の家々が並ぶ。川と海の魚と、森からの恵みの食べ物は、しっとりとした甘さがあった。(→食べ物については辻垣さんの詳しい記述あり)

遠隔地のタボロ村は、どこに行くにも苦勞する。東隣のウボル村方面には、歩いてこうした農産物を売りに行く。ピートルナッツとココア豆は、横断道路経由でのキンベに行きとなる。

夜になって暗闇で水浴びをする。川から階段を登った庭の囲い(女性客用)の中で、準備されたバケツの水で身を洗う。辻垣・渡邊両氏は、下の川で水浴びをするときに、暗闇と流れの早さで溺れそうになった。その折りに辻垣さんは転んで足に数箇所のかかなりの怪我。それでも微笑みを絶やさぬ仲間たちだった。三人ともタフに旅を乗り切ろうとしていた。

## 11月3日(火)

コカトゥは宿舎の後ろの樹の枝に巣を造り、鷺は弧



Brown Cuckoo-Dove



人々はカヌーを操って海と川と森を往来する。

を描いて海と川と奥地を行き来している。ありとあらゆる鳥たちが囀っている。

朝食は芋と魚とパイヤで、美味しく工夫された料理だった。

渡邊さんは探鳥に。辻垣・清水は女性たちとのミーティング、つづいて男性とのミーティングが企画されていた。

女性グループとのミーティングはとても良かった。真剣に話し合い、聞きあい、素朴で仲がいい。

「畑のタロイモなどを担いで、ウボル村まで片道3時間も歩いて行くの。それでも売り上げは5キナから10キナ(日本円250円から500円前後)なのよ。暑さと辛さで泣きながら歩くのよ」とひとりが言うと、皆も「そうさそうさ」と付け加える。「発言は平等でも、水汲み・子育て・食事づくりは、私たちよ。女たちは苦勞で30歳から40歳で死ぬのよ。男性は50歳以上も生きるのにね～」と代わる代わる言う。

女性たちは、私が伝えたハイビスカス・ドリンクのつくり方もすぐに習得した。

この村の女性たちのエネルギーは素晴らしかった。「身土不二」(身体と土はひとつ)と言われるように、





料理名人のローサさん

原生林の森の土からのオーラが溢れていた。

あのソロモン諸島のレオナ村の女性たちが、伐採企業のブルドーザーに立ち向かうこと3ヶ月、ついに企業を追い出したように、このタボロ村の女たちならきっとできる。森を守ることができる！心からそう思った。

男性とのミーティングでは、SABLからの脱却への裁判の支援依頼が出た。



右からウィリアム首長、ピーター・キケレさん、辻垣

タボロ村は、伐採こそ始まっていないものの、政府とリンブナン・ヒジャウ社の不法手続きによってSABL地域に入れられてしまっている。レラ・ホール



「夫がヤシの葉でバスケットかマットを編むの」と妻



ヤシの葉で葺いた屋根。魚を捕る網が見える。

ディング社という地主会社の名前で、企業が現在不法伐採中のポマタ、ナキウラ、ラロパル地域を切り尽くしたら明日にも、この地にやってくるかもわからない。「タボロ村としては一刻も早く、この不正から脱却して土地と森を奪い返したい」と言う。

(この状況は、ウヌ・シゲテ地域としてSABLに入れているマラクル村とて同じであった)

何とか手をうちたい。その思いは同じであった。辻垣さんは、「私たちも生命をかけて原生林を守ります」と約束する。後日、ウィリアム首長からは辻垣さんに、深海の真珠貝を贈るなどの熱い友情が表明された。

今回の旅をオーガナイズしたFORCERTは、タボロ村と頻りに交流しつつ簡易製材機のローンでの支援を行っている。

午後は、村の家々を訪れる。

タボロ村では私設学校をつくっていた。その先生の一人が話に来る。SABLの不正問題も知り尽くしている人だった。こういう先生に教えてもらえる子どもたちは幸せだと思った。



## 11月4日（水）マラクル村へボートの旅

朝7時出発。両岸で手を振る村人たちに、「ありがとう、また来ますね！」を繰り返す。ピーター・キケレさんのピシッとした舵さばきで、河口から海への波を乗り越えると、心地よい海の旅が始まる。海を知り尽くした男の姿が頼もしい。

2013年の旅で、宇宙遊泳と海の光に囲まれたあの海への旅で心が躍る。鳥たちが私たちの周りを舞う。夜であったなら、母なる海の底に光る生きものたちに出会えるはずの海であった。

途中で天候に変化が起きた。目も開けてもらえない激しい雨が氷の大粒のように襲ってきた。全身濡れ鼠のまま、一同無言となって延々と耐える。私は慣れているが、こうしたことに対処できる辻垣・渡邊さんたちを見直す。熱帯の雨は生ぬるいのがせめても救いだった。

途中、雨の向こうのポマタ地域に伐採の爪痕と大型の運搬船の着岸が見えた。まさに裁判で「森を守る会」が支援してきた地域である。

ようやく雨もやむ頃に、ボートはジャキノット湾の入口のマンガヌナの湧水浜辺に着く。ここでしばしの



マリアさんがこの成り行きを子どもたちに説明し、子どもたちは興味深々。



スシ泉の流れはあいからず強く、川のようにあった。

休憩をし、美味しい湧水を飲む。そしてついにジャキノット湾の波をすべるように、マラクルの浜辺に入る。

## 11月5日（木）

マラクル村では多少の変化が起きていた。悲しいこととして、森を守るリーダーであったオットーさんの病気による帰天があった。彼のおおらかな笑顔に再び接することができない。喪失感で胸が締めつけられる思いがする。（→オットーさんについては2015年ニューズレター、HPに詳細記事あり）

でも彼の願いを引き継いだかのように、彼の甥のイギー・マタピアさんという活発な若手が、ウヌ・シゲテ地域（マラクル村を含む）のSABLからの脱却を目指す取り組みを始めていた！（パルマルマル滞在）

一息入れて、泉に水浴びに行く。

昨年崖から落ちた清水を助けて運んでくださったという女性にそこで再会する。そのときの彼女の力強い腕をしっかりと記憶しているが、夜明け前の暗闇であったため、“君の名は”……の名も知らず。その人の名はマリアさんだった！熱い感謝の抱擁を交わす。

マラクル村滞在中、辻垣・渡邊両氏は、ホテル調査・探鳥・釣り・カヌー漕ぎ・村人との交流などを行う。（→両氏による詳細な報告あり）



辻垣（左）・渡邊（右）両氏







中央はマラクル村の宿の主ポール・カテ神父



## Ⅱ 不穏な動きと村々の抵抗

11月6日（金）

辻垣と清水は、ジャキノット湾岸のマカエンで、ポマタ地域からの村人との会合を持つ。ポール・パボロさんの呼びかけに、カイトン村、ムー村、マンガヌナ、マルマル地域の17人ほどが続々と集まって来られた。ここでもSABLからの脱却と土地を取り戻し、伐採をストップしたいとの思いが表明された。今までの抵抗と裁判の結果、伐採中止命令のあったときの喜びなどもわち合われた。加えて企業による伐採の再開に対処すべく、今後の裁判への願いが強調された。

しかし、この会議には、なにやら不穏な外部からの人の動きがあり警戒が必要だった。不思議なことに集会の外をジョン・パルレアなる人物（広大な原生林を企業に売り渡した仲介人）がうろうろしていたのである。

私を見るなり、「あなたのことは以前から知っている」と彼。

「あなたのことも知っているわ」と私。もちろんニューブリテン島で彼を知らない人はいないほどの人物である。

今まで空港や飛行機のなかで、彼が伐採業者といっしょにいるところを見てきたものの、声を交わしたことはなかった。そうか、向こうも私を知っていたのか！

私は気を引き締めて向きあった。今日こそきちんと言おう。

「あなたの仲介による不正と欺瞞契約、SABL問題、伐採誘致、森が失われ、村人がどんなに苦しみつづけてきたか……」。

ジョン・パルレアは笑いで誤魔化しながら、「村人はお金が必要なのだよ。伐採とオイル・パームで村人は収入も得られる」。

これはリンブナン・ヒジャウ社のボスが、かつて私に語ったのと、まったく同じセリフではないか？

彼は広大な原生林を企業に渡しただけではない。その後も企業側の手先として、「学校で伐採反対を教える先生の名を見つけ左遷させろ」と意見を提出するほどの裏切り行為を平気でしている。

私の胸のなかで、この日、怒りが噴火した。

不穏な動きの具体化は、少し前からラバウル発で始まっていた。

カトリック教会のフランシスコ・パンフィロ大司教とダグラス・テンネント顧問弁護士による介入であった。

「教会が伐採企業と村人を仲介し、リンブナン・ヒジャウ社（ギルフォード社）という伐採企業への村人の抵抗と“紛争”をやめさせる。伐採企業と村人を“和解”させ、SABLも土地問題も、伐採もオイル・パーム・プランテーションの存続も許す一方で、企業にはサービス（学校・クリニック他の建設）を要求する。その“新しい契約”を企業と村人の間で結ばせる」というものであった。

ポール・パボロさんは怒る。「そのやり方は、森を守り、土地を取り戻そうとしている村人にとって、とんでもない仲介工作である。私たちはそんな“妥協”

にも、調停にも応じない。伐採を許すだって？そんな勝手な教会のやりかたは、今まで以上の不正義をもたらすだけだ」と指摘する。私もポール・パボロさんと同意見である。

### 11月7日（土）マラクル村の動き

ルカスさんはマラクル教会のリーダーである。イギー・マタピアさんの意向と同じく、「SABLの却下と土地を取り戻す裁判をしたい」とそっと私に呟く。優し大人しいルカスさんまでも。そうか。事態は裁判への模索に動いていた。

西はタボロ村のレラ地域、東はマラクル村のウヌ・シゲテ地域を含む広大な原生林（おそらく世界で最後の原生林）が東西一体となって（いままでは、個々に抵抗してきたが）、一緒になって企業に対決する方向に始動しようとしていた。

### 11月7日（土）

辻垣・渡邊両氏は、タボロ村経由ホスキンスに戻る。「さようなら、いろいろありがとう。無事でよい旅を！」と見送る。



マリアさん（左から2番目）と姉妹たち



### 11月8日（日）

夕方から風雨となる。天井と窓から雨が入り、自作の寝袋も湿気で冷たい。寝付かれないまま寒さに震えて夜を過ごす。

食事などの世話役のマリアさん（宿主ポール・カテ神父の姉）は、今年を始め以来半身が少々麻痺状態であり、彼女の姉妹が入れ替わり手助けに現れる。

### 11月9日（月）

ラバウルへTropic Air機に乗ってジャキノット空港を出発する。リンブナン・ヒジャウ社の操業によるもので、同社の伐採関係者と、東ニューブリテン州の知事と秘書が同乗していた。

この月曜日便は、伐採拠点を巡る。機材やスタッフを乗降させながら、最後はラバウルに向かう。伐採企業の都合で時間も左右される。今回はかなり早めの出発だった。

ラバウルに近づくと眼下に広大なココナツの林が展開する。その葉っぱが枯れかかっている。ラバウルも干ばつで水不足のようであった。

### ダグラス・テンネット弁護士との会見

夕方、ダグラス弁護士（大司教の法律顧問なので敷地内に居住）に勇気を持ってインタビューに行く。どんな人物なのだろう。興味津々でもあった。

70歳位だろうか、ニュージーランド人であった。独特の発音が聞き取りにくいので録音させてもらう。彼の計画は、すでに私がここに前述した内容のとおりであった。

彼は誇らしげに語る。

「リンブナン・ヒジャウ社は政財界に巨大な力を持ち、伐採をとめることはできない。だから、この“新しい契約”は、村人を救う唯一の方法なのだよ」。

彼は、リンブナン・ヒジャウ社のボスとその弁護士（Warner Shand Lawyers）とも“ツーカー”の仲であると述べ、仲介人のジョン・パルレアさんとも連携を持っていると語る。まずはじっくりと彼の話聞いておこう。

ダグラスさんは、企業側からの話や、企業との馴れ合いを土台にしたような伐採問題の把握から、“妥協”案を彼流に練り上げていた。翌日もダグラスさんと話す。彼の意図がはっきりしてきたところで、やんわり



と言ってみた。

「それは企業との“妥協”で、村人の意図と逆だと思えます。そのうえ“新しい契約”で企業への従属を後世に残して、森は失われるまま。それでいいのですか。そのような介入なら、しないほうがいいと思いません」。

数日後、大司教とダグラス弁護士は、ジョン・パルレアさんを教会に宿泊させ、打ち合わせを進める。森を売った仲介人に宿を与えるまでのやり方に、ポール・パボロさんたちは驚き怒る。

## 11月10日（火）

ポール・パボロさんが来る。企業側からのいやがらせ裁判に出頭してきた後であった（4頁に詳細）。ポールさんの顔に疲労が滲み出ている。「もう1ヶ月半も村に帰っていないのです」と寂しそうに語る。

私は「森を守る会」からの支援金を、いつもの私たちの弁護士の手に託し、今後の支援を約束する。



ポール・パボロさんとフランシス・メリ神父

## 11月11日（水）

夕方になってポール・パボロさんの再訪。彼の顔が腫れ上がっている。マラリアの再発で病院に行って注射してもらってきたところだそうだ。

「ヤスコが明日帰るので、ぜひ紹介したい人がいる。僕の裁判の証人として出頭してくれた人だ」と言う。それはモイゼス・サレレさんという目の大きな若者であった。

彼はラロパル地域（ポマタ地域の西）のマウナ村に生まれた。東はバイラマン川、西はトロ川の間の大



モイゼス・サレレさん マウナ村の若きリーダー

な1万3000ヘクタールの地域である。その一部にはEUの尽力で”保護区”とされていたMalupa Land（Malupa川奥地の原生林）も含まれている。

原生林を守る住民の熱意は強かった。

ところが前述のジョン・パルレア仲介人の企みによって、2008年に不正・欺瞞の操作を経てSABL下に入れられてしまう。2010年末に伐採が開始された。

マウナ村では、老人を中心に非暴力の道路封鎖などの伐採阻止を行う。モイゼス・サレレさんは、そうした村人の抵抗の若きリーダーでの一人であった。

「森林省に手紙を書いて訴えても握りつぶされた。中央政府も、地方政府も、警察も何らの助けを村人に差し伸べなかった。企業はボリスを雇い組織的な暴力を持って今に至る」と語る。

2013年11月9日には、企業が“保護区”へ機材侵入させようと計り、これに対して15人の村人が非暴力で阻止。「懲らしめのため企業側は、村人をカンゲロナ・キャンプ（その地域の操業拠点）へ誘導し、コンテナーに閉じ込め、叩きのめして負傷させた。若者たちはなんとか逃げたのだったが……。逃げられない人々もいたんだ」

## マウナ教会での企業による襲撃事件

密かに武装集団を結成した企業側が、ブッシュナイフと斧と石を持って、教会に集まった村人に襲いかかった。人々は素手で抵抗するが、老人マチアス・パトさんは腕と肺と頭に重症を負い、ラバウルの病院に運ばれ、以後数ヶ月も入院する事態となった。このことは全国紙（2013年11月20日）にも報道され、反響を呼

んだ。しかし企業による暴力がやむことはなかった。  
(2014年3月発行のニューズレター HPにも掲載)

モイゼス・サレさんは続けて言う。

「企業は私たちを日中の太陽の下に座らせ、拘束し、鞭打ち、殴打し、残酷なことにはレモンの枝（刺々のある枝）で私たちを打ち、コンテナに閉じ込め、あらゆる暴力を振るうのです」

「でも私たちはめげません。私たちの土地を取り戻し、森の伐採をやめさせるまで……」

「報道陣も来ない、遠い遠隔地の村での孤独な闘いの、私たちの訴えをぜひ、多くの人々に伝えてください」

モイゼス・サレさんの澄んだ瞳に涙が滲んだ。

### ラバウル最後の夜

ラバウル最大のスーパーマーケット経営者サンドラさんの夫の誕生日パーティーがあり、私も招かれる。毎年のことである。地元ビジネス関係者、政府・医療関係者、教育関係者、教会、在ラバウルの欧米系とアジア系の人々が招かれていた。日本からのJICA・海外青年協力隊員、住友林業の現地社長（ニューブリテン島からの丸太買い付け）、オイスカ所長、オープンベイ・ティンバー社（ユーカリ丸太輸出・原生林からの木材の輸出）社長等のお歴々も列席し、増築された大ホールでの大賑わいの飲み放題、食べ放題の饗宴となった。私も海外青年協力隊の若者と話を交わしていたのだが、そのざわめきのなかで、ふと虚しくなる。

あの涙をいっぱい溜めていたモイゼスさん。マラリアで膨れ上がった顔のポール・バボロさんを思う。村から出てきても、彼らには寝る場所も食べる物もない日々が多々ある。彼らの故郷の森で苦難の抵抗している多くの人々がいる！

ラバウルの夜、帰路を辿りながら「どうか助けてください」と星に祈った。満天の空からも涙がこぼれ落ちてくるようだった。

### 11月12日（木）

ラバウルを早朝の6時55発、ポートモレスビーに8時過ぎには着いた。

干ばつは続いており、時間断水があった。

画家のマーロン・クエリナドさんと再会する。墨一

色の絵も書いているとのことだが、少し元気がないのが気になった。

### 11月13日（金）

ポートモレスビーで、原生林の森からのメッセージを届け、関係者・NGOグループと、今後の方針についてじっくり話しあう。

### 11月14日（土）

2時間遅れの便でポートモレスビーを発った。真新しい飛行機であるが故障で、別の便での再乗車・出発となったためである。

夕暮れの雲を眺めながら、3週間の旅の出来事を走馬灯のように思い巡らせて過ごす。

これからも、私たち「森を守る会」は、日本の多くの仲間たちと共に、森を守る村人たちの思いから学び、しっかりと寄り添い、連帯と支援をつづけて行きたいと誓う。

いつも支援してくださっている皆様に、まずはこの文を通して、感謝の報告とさせていただきます。

これからもよろしくお願い申し上げます。

清水靖子



マラクル村の人々



# 残された森に生きる村を訪ねて

## —五感で生きる人々—

2015年10月30日～11月10日

辻垣正彦

11月1日～3日

アミオ 伐採の後遺症は……

中学校の同級生の渡邊充夫君とパプアニューギニアへ旅立った。ポートモレスビーからニューブリテン島のホスキンス空港に到着。コスマス・マカメトさんの出迎えを受け、彼の自家用車で一面焼けただれたオイルパーム・プランテーションを両側に見てキンベの町へ向かう。1時間のドライブ後、MSA修道院で清水さんと再会。その夜は司教さまの館に泊めていただく。翌日早朝出発。南北をつなぐ唯一のラフ道路を8時間かけてようやくアミオ村に到着。

11月3日、アミオ村近くのシメ川に村の若者たち数人の案内で魚釣りに行く。日商岩井（SBLC）がかつて丸太を運んだ道。橋も崩れ落ち、赤茶色に錆びた柱脚が無残な姿をさらけ出している。干ばつのためなのか、また、森を激しく伐採した後遺症なのか、柱脚の廻りを除いて水量は膝くらいまでしかない。水の透明度は上がってはいるが、森の回復が不十分なため、石に泥がうっすら付いている。日本の溪流のようにない。魚影も少ない。日本から持参した折り畳み式全長7.0Mの竿にしかけを取り付け、餌のみみずを鉤に付け、流れの落ち込みに振り込むと、何と当たりがあり、目の大きな10cm位の白いタナゴのような魚が銀鱗を



崩れ落ちた伐採道路の残骸

躍らせながら釣れた。その後1時間程ねばったが、釣果はなし。大物を釣る夢は失せてアミオ村まで40分位ゆっくり歩いて帰路に着く路すがら、ココナッツの実を村の青年たちにご馳走になったり、水汲みに向う女性たちと次々と挨拶を交わすことができた。



村人にココナッツをご馳走になる

その後一人で村の中心的水源アウムの泉を訪れたが、水量は少なく、昔の面影はない。森を消失した影響は大きいと思わずにはいられなかった。

日商岩井（SBLC）によって森が伐採されたため、水浴できる水量もなかった。完全に復活するには、森の自然なる回復を待つしかなく、100年以上の年月が必要であろう。

森と水、この両者の関係は実に密接であり、地球の生物、人間だけでなくすべての生態系にとっていかに大切であるかを改めて実感した。

地球上にある水量の97.4%は海水であり、陸上にある水（河や湖）の水量は0.021%と、ごく微量であることを忘れてはいけない。

パプアの森は天然林であり、商業目的に伐ってはならない。

逆に日本のように人の手で植えた人工林は、伐採し



シメ川で釣れた小さな魚

用材として利用し、植林する伝統的サイクルを大切にしなければならない。

木材自給率30%を下回る日本。外国で植林することも大事であるが、日本の杉、桧を住まいや教会、超高層ビルの内装などに合板ではなく、無垢材を使用することによって、日本の森は復活する。売れないため、下草も枝打ちも、間伐もされない日本の森は林業専門家も高齢化し放棄され、瀕死の状態である。グローバル経済の歪みが農業、漁業以上に林業にも強く表れている。

11月4日

### 原生林の中のタボロ村

アミオからボートで1時間、タボロに向う。村人の大歓迎で迎えられた。

ゲストハウスのホールでパーティーが行われ、夕食となった。食卓には、パパイヤ、バナナ、マンゴー、ココナッツミルクで練られたパン、マンゴージャムが用意されていた。勿論主食はタロイモ、ヤムイモの芋類である。ニューブリテン島の北側、森のないところは干ばつで悩まされているが、ここタボロ村は豊かな川と海があり、降雨もあり、果実が見事に育っている。ボートを運転していたピーター・キケレさん、ウィリアム首長がこの村をリードしている。

村の中央を流れるタボロ川が森の恵みを運ぶため、海には魚が溢れているようだ。アジの種類の焼き魚が出た。渡邊さんは、5年前から大好きだった焼き魚が食べられなくなっていた。しかしここタボロでは食べることができたのである。5年振りとのこと。

5年前といえば、福島原発事故の起きた頃であり、



村の教会のミサは村人でいっぱい

放射能アレルギーではないかと気づいた。いつの間にか53基の原発を造ってしまった日本。原発事故はその冷却水を海に捨て続けてきたため、いつの間にか汚染され、生態系が蝕まれてしまっているのではないだろうか。今の日本人の五感では感知できないだけで、取り返しのつかない海になっているのではないだろうか。

パパイヤも大きく、香りも色も豊かでおいしい。消毒もせず、人工的栄養（肥料）も与えず、太陽と豊かな水のミネラルを含んだ土壌。目に見えないバクテリアや生物で育てられ、神から与えられた原始の生態系の中で育まれているのだ。一口食べると、私の体細胞



タボロ村・ゲストハウスの裏で魚を薪で焼く





タボロ村中央を流れるタボロ川

も喜び輝いているようだ。知らず知らずに文明社会の中で失っていった感覚は取り返しがつかない程大きい。

### 荒海の旅路

素朴な565人の住むタボロ村と別れ、ピーター・キケレさんの操縦するボートで、マラクル村へ向かった。荒海3時間の航路である。吾々「森を守る会」が裁判支援しているポマタ地域、ラロパル地域、ナキウラ地域の海岸を見続ける海の旅であった。海寄りの森は皆伐され、地肌が表れ、伐採道路が血管のように張り巡らせられ、太い道路が奥地に向っている。一部、浅緑をしたゾーンは、アブラヤシの苗が植林された所であ

る。ポマタ地域のリーダー、ポール・バボロさんは、リンブナンビジャウ社を相手に村人をまとめ、素手で抵抗し、裁判を起こし、伐採を一時中止まで勝ち取ったのである。しかし企業側はポートモレスビーで新たな裁判を起こし、前判決を覆して今にいたっている。森は神からの贈り物、村人の生命の源なのに。

アブラヤシは村人のためにはまったく意味のないもの。EU・日本など先進国のためのものであり、強烈な消毒薬を散布することで素足素手の労働者たちは健康被害が出、土壌はやせ、海や河川は汚され、魚貝類もとれなくなる。タロ、ヤムも消滅し、葉草も野豚もいなくなる。もちろん大切な水は枯れ、泥にまみれてしまう。

接岸している巨大な丸太運搬船をはるかに見ながら、悲しみと共に怒りが混みあがって来るのを禁じ得なかった。自然を尊び、その中で生きる村人の生活を踏みじめることは許されない。私たちが享受している熱帯林やパームオイル（パン、冷凍食品、インスタントラーメン、化粧品、スナック菓子、石鹸など）を使う時、このことを忘れてはならないと揺れるボートの中で強く思った。



マラクル村中心部の見取図

植林という言葉は、必ずしも美しい言葉ではない。先進国が利するだけの植林は赦されてはならない。

11月5日～8日

### マラクル村 保たれる生態系

3度目の訪問となったマラクル村。ボートから降りると子供たちが出迎え、荷物を運んでくれる。村人に眼鏡をかけている人は一人もいない。電気がないのだ。夜テレビを見るわけでもない。石油での自家発電はあるが、特別であり、一般家庭ではない。外灯もない。

夜は漆黒の闇。螢の樹に集まる何千何万という螢の光は天空の星と同化し、ひときわ彩やかにショーを繰り広げる「南国のオーロラ」である。我々日本人はテレビ、新聞、パソコン、映画、広告、夜の宿題、読書などなど情報の殆どを目から得ているが、マラクルの村人は視覚だけでなく五感をフルに使って生活している。



眼鏡をかけた子どもは一人もいない

渡邊さんと夕暮時、鳥を探しに出かけたが、現地の若者が指差すはるか樹上の鳩を見付けることができなかった。彼らの視力は驚くべきことに、9.0といわれている。耳もPPPPPPかすかな中のかすかな音も聞き分ける能力を持ち、鳥の囀りも会話の意味を理解し、鳥とも会話できるようである。当然、樹や草花とも会話している。



カイトン村の先生

宿泊させていただいたマリアさんの家での食材は、

すべて自然豊かなものであったが、とりわけ新鮮な焼き魚が毎日食卓に出された。握りこぶし程のタロ、ヤムの芋類は毎日、毎回出された。

特筆すべきは、煮ても焼いてもココナッツオイル以外、調味料の塩、砂糖、コショウ、ソース、醤油などは一切使わないことだ。だから私には何か物足りない感じがした。しかし彼らの舌は、魚の種類、住処のミネラルを含む水の香りと味、畑の土の香りを微妙に嗅ぎ分けている。素材そのものの味を楽しんでいる。ソース作りから始まるフランス料理とはまったくアプローチが違う。冷蔵庫などない。保存という考え方がない。彼らのソースは、海水であり、バクテリアが創り出す土の香りなのだ。素材の育った、海、河、土の味を味わっているのだ。

臭覚もそうだ。森を中心とした生態系の香、太古から培われ天から与えられたオリジナルの香。

先進国の失ったものがいかに大きいか。電気に支配される日常、喧騒の都会に生活し、海、土、空気、河川の劣化する毎日に、どんな未来があるのだろうか。文明人は鼻の形にはこだわるが、嗅ぎ分ける力を失っている。五感再発見の旅でもあった。

豊かな森が守られているマラクル村、タポロ村のような文明の利器をあてにしない生活は広大な森があって始めて成り立つものである。SABLの下、先進国の求めに応じて広大な原生林を伐採し、アブラヤシやアカシアだけを植林し、環境にやさしいと称して、パームオイルを絞り出し、紙の原料となるアカシアをチップにして輸出する。村人の了解を得ず、何の利益ももたらさないまったくの自然破壊。

村人の生活、姿そのものが天国を表現している。これこそ宝なのだ。森林伐採を中止させるために闘っている小さな村人たち、そのための多くの訴訟を支援することは「森を守る会」の大きな目標でもある。

ご支援を心からお願いいたします。



ハイビスカス・イエロー



# ニューブリテン島の旅

2015年10月30日～11月10日

渡邊充夫

8年前の私は鳥と云えば『ハト・カラス・スズメ・・・』位しか分からなかったし関心も無かった。それが自宅近くの利根川の土手を散歩していた時、目の前を綺麗な鳥が横切った。後でわかった事です『カワセミ』でした。太陽の光に照らされて何とも言えない美しく綺麗なブルー、今でもあの時の感動が目に焼き付いています。



カワセミ

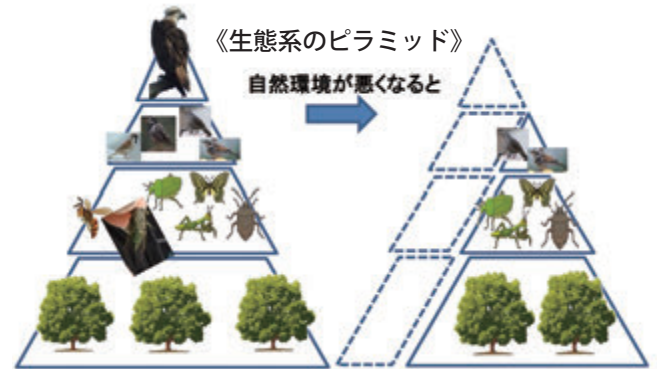
その時以来、身の回り  
を良く観察するといろんな種類の鳥が居る事にきずき驚きます。いつの間にかイッパシに「双眼鏡・スコープ」を買って市の主催する探鳥会・日本野鳥の会にも入会し、バードウォッチングにのめり込むようになりました。

初めて市の探鳥会に参加した時 指導者の言葉が今も思い出されます。

それは『自然界では植物と動物 それぞれ複雑に関係しあって生きています。複雑な関係とさらに水や太陽エネルギーが様々に関係しあって出来るのが生態系です。』

生態系の仕組みを単純にして分かりやすく図にすると右上の図です。

ピラミッドの一番下に有るのが植物(森林・草木・・・)、太陽エネルギーを使って二酸化炭素と水からデンプン有機物を作ります。二番目は昆虫類 植物を食べて生きています。三番目は小鳥類、昆虫・草木の実を食べて生きています。一番頂点に居るのが猛禽類と呼ばれるワシ・タカ類です。小鳥・昆虫・草木の実を食べて生きています。



もしもピラミッドの底辺である森林・草花が破壊されたらどうでしょう。昆虫も居なくなり小鳥たちもさっさと飛んで居なくなります。当然ピラミッドの頂点に居るワシ・タカも居なくなります。

従って自然環境が正常で有るか無いかは、鳥達が居るか居ないかで分かります。鳥を調べるといろいろ面白い事がわかります』

その一例として現存する鳥の種類は約1万種、大きさは最少はマメハチドリで5cm、最大でダチョウ2.75m、体重はマメハチドリが2g、ダチョウ100kg、多くの鳥達は毎年夏・冬の前に長距離渡りを行います。それはみんな生きる為に餌を求めての事です。

又、ヒマラヤ山脈を10月上旬8,000m上空を小さなツルが数百から数千羽、Vの字を作り北から南に上昇気流によって決死の大飛行をして山脈を越えて行く。その鳥の名は『アネハツル』です。

上空気温は氷点下30度 酸素濃度は地上の3分の1 過酷な環境での決死の大飛行です。

長距離を渡る鳥で『ハシボソミズナギドリ』が日本の付近にいます。

オーストラリアから日本にやって来ます。中には日本を通り越して北極海まで行く個体もいます。オー

ストラリアに帰る時には太平洋を渡るのではなく不思議な事に北米大陸の沿岸を南下します。往復の距離を合算すると3万kmにもなります。

私はそんな鳥達に魅せられて益々のめり込んでいます。

テレビで見たパプアニューギニア (PNG)のシンボル極楽鳥『アカカザリフーチョウ』PNGの国旗に取り入れられています。

この美しい鳥をこの目で一度見てみたいと常に思っていました。念ずれば通じるのか運命的出会いでニューギニア航空に関係している方が一緒に行くのでしたらご案内しますと・・・

現地の人にも紹介して頂きホームステイをして既に3回も探鳥する事が出来ました。夢にまで見た『アカカザリフーチョウ』に出会う事が出来ました。



アカカザリフウチョウ 国旗にも使われている

運命的出会いが又ありました。辻垣氏との出会いです。辻垣氏とは浜松の中学の時の同級生です。

東京に出てから同窓会がありました但其の時は一度も話した事はありませんでした。4年前有る人から教えて頂き、辻垣さんが『PNGとソロモン諸島の森を守

る会』を立ち上げて、ドエライ仕事をしている事を初めて知りました。森を守ると言う事は鳥も守る事。ましてや身近にPNGに関係する人がいようとは 私はすぐに連絡



Crinkle-Collared Manucode

して入会させてもらいました。今度辻垣氏がPNGに行く時は一緒に行くように頼み今回に至りました。PNGでも今回は『ニューブリテン島』、本島とは違うのでどんな鳥達と会えるか楽しみでした。

### 《アミオ》

村で鳥に詳しい若者と子供達9人でアミオの森の中を探鳥

ヤシの木が両サイドに植って居る道をかなり歩く。最初に出会ったのが日本で云う何処の国でも居る『カラス』鬱蒼とした木々。

初めてお会いする鳥達。名前が分からない。子供達があそこに居るよ。こっちに居るよと教えてくれ、カメラを向けシャッターを押す。面白かったのは写真を撮ったその都度どの様に撮れたか9人の子供が覗きに来る事です。ズームで撮影しているので自分が見たものと違うのが不思議に思うのだろうか。帰りに高さ15mもあるヤシの木に登りヤシの実を取ってくれた鉈で器用にむきフレッシュジュースを飲ませてくれた。最高！！大きな目でニコニコ答える。私はたどどしい英単語で子供達に『Nature』『Bird』『Forest』『Happiness』『Cute』

### 《タボロ》

ここでも村の鳥に詳しい若者の一人に案内され彼は裸足で密林の中を探鳥した。

歩く道は俗に言う獣道。ぬかるんでいて歩きにくいし、草木が行く手を阻む。PNGでは何処でもそうだが長さ1m幅5cm位の刀を子供達も持っている。草木をバサバサ切って進行する。大勢集まると怖い。木が密集していてなかなか鳥達をとらえる事が難しい。川を渡るのには恐怖だった。川幅5m位、橋下3m激流、直径50cmの丸太が一本渡してあるだけ。

彼にカメラと荷物を預け手を引いてもらい一步一步渡る。彼は大丈夫・大丈夫と笑って云うが・・・



今思うとよくも渡ったと思う しかも帰りも・・・。

## 《マラクル》

地形は海辺から直ぐ急な山になっている処に7か所の部落が点在している。

人々は、飲料水・洗濯物を海辺に接した泉に行く為に急な坂道を登り降りして生活している。

今回は私一人で探鳥した。この急な坂道を30分位登っただけで息切れしてしまい、道に座り込んでしまった。そこに3人の子供を連れた若いママが来て村で休んで行きなさいと誘ってくれた。初めて会う日本人を10人位の村人の環の中にニコニコした顔で迎えてくれた。オレンジを食べるかリーダーが云ってくれたのでご馳走になる。リーダーの息子がスルスルと木に登りオレンジを取ってくれた。急坂を登ってヘトヘトの私は願ってもない新鮮なオレンジ、美味しかった。初

めて会う私になんでこんなに親切にしてくれるのか。『Thank you』『Thank you』『Delicious』帰りはおみやげとして10個も頂きました 『Thank you』



パプアシワコブサイチョウ

## 《今回の成果》

カラス/ハリモモチウシャクシギ/パプアシワコブサイチョウ/Yellow-Facepmyna/Red-Knobbed Fruit-Dove/Singng starling/Red-Knobbed Imperial-Pigeon/Metallic Starling/Long-Tailed Buzzard/Blue-Eyed Cocktoo/Brown Cuckoo-Dove/Meyer's Goshawk (日本名が分からないので英名で)

合計35種

## 【会員からの便り】

# パプアニューギニアと身の回りの自然

埼玉県越谷市  
倉川秀明

私は有機農法で野菜を栽培している百姓です。約10年前から新規で農業を始めたので、農地は借地です。私の畑がある埼玉県越谷市は人口約30万人、宅地開発が進んでいますが、市の周辺には古くからの農地がまだ残っています。私の畑も昔からの農地の中の一部です。

私は畑に自然の生態系を取り戻すことで生命力のある野菜を栽培したいと願い、畑の草や生き物を奪わない農法を続けてきて、年々畑には様々な草が増え、鳥や小動物や昆虫も驚くほど増えてきました。

しかし、去年から畑に入る農道を舗装する工事が始まり、ほぼ自然の状態だった水路は潰され、コンクリートのU字溝がはめられました。また、畑のすぐ近くにある小さな浅間神社が建て替え工事中なのですが、2月に入って社の周囲の背の高い木々をほとんど切り倒して、社は裸同然になってしまいました。この神社はこの地域で今でも残る貴重な自然の象徴のような存在でしたが、どうしてこんなことをしたのか、氏子の方々は何を考えているのでしょうか。また、この神社の目の前に広がる田畑に霊園の建設計画が具体化して、田畑の地主たちは皆土地を売ってしまいました。私の畑の大部分も売られてしまい、私はここでの農業はできなくなってしまいました。

パプアニューギニアでは、もう30年以上前から原生林が伐採されてきたのですが、未だに伐採が続いていて、住民たちが裁判を含めて伐採をやめさせる運動を同じく長い間続けています。はるかかなたのパプアニューギニアでも、私の身の回りでも、人々は自然を壊し、目先の利益に走って顧みようとしません。パプアニューギニアの森を守る人々の闘いは、私自身の闘いでもあるのです。

## 【前回集会参加者からの声】

「もっともっと、こうした小さな島で起こっていることを日本の人々に伝えて頂きたいし、伝えていきたいと思っています」

「人々の美しさ、清さ、子どもたちの生命みなぎる眼差しと出会わせていただき、癒される思いでした」

「満天の星空と海の中に光る生き物の話に感動しました」

「ニューズレターの写真が多くイメージしやすいし、まとまっていてわかりやすかったです」

「一参加者としても、このような素晴らしい活動が社会と子どもたちに伝えることに、ご協力できたらと思います」



ジャキノット湾



タボロ村の子どもたち



マラクル村の子どもたち

### ◎年会費・カンパ受付

郵便振替口座 東京00100-1-614216 パプアの森  
2016年度（4月～3月）3000円  
よろしくお願いたします。

◎DVD 調査報告の動画 1200円（送料込み）  
を販売しております

ホームページ <http://www.pngforest.com/>

### パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会

ニューズレター『太平洋の森から』第36号

発行：パプアニューギニアとソロモン諸島の  
森を守る会

〒141-0031 東京都品川区西五反田8-10-14-206  
辻垣建築設計事務所内 電話03-3492-4245